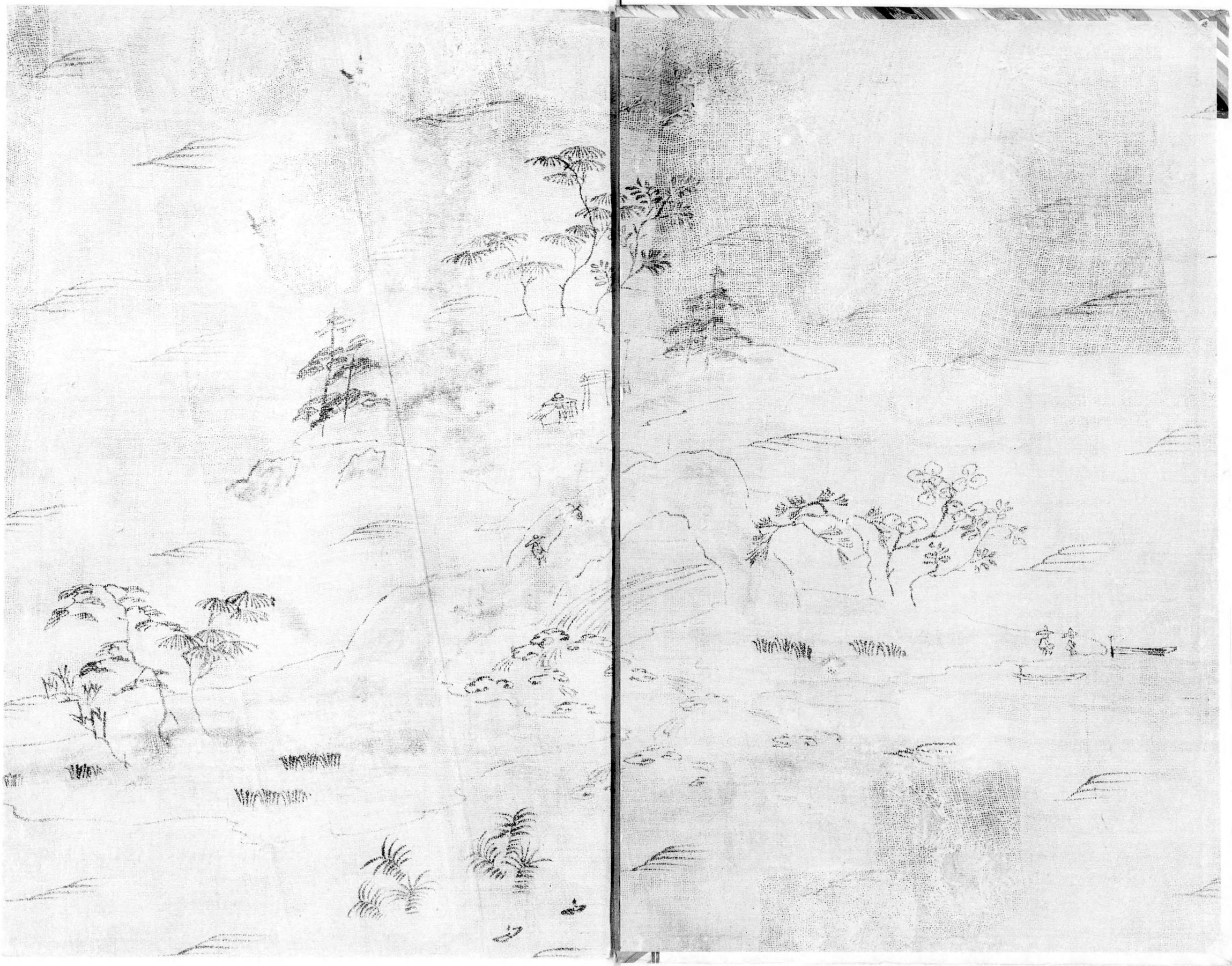
E704.2
Ko49
(15)

正倉院御物圖錄　十五

省務内
19.3.18

始



帝國圖書館藏

E709.2
K049
(15)

正倉院御物圖錄　第十五輯

南倉納物

目次

第一圖　紫檀小架
第二圖　同　上細部
第三圖　鳥毛貼成文書屏風
第四圖　同　上細部
第五圖　瑁杖
第六圖　同　上細部（其ノ一）
第七圖　同　上細部（其ノ二）
第八圖　假斑竹杖
第九圖　衲御禮履（全形）
第十圖　同　上（正面）
第十一圖　履（全形）
第十二圖　同　上（側面、內部）
第十三圖　同　上（內面、背面）
第十四圖　赤漆欟木胡床

帝國圖書館藏

第十五圖　赤漆八角床（正面）
第十六圖　同　上（上面、側面）
第十七圖　榻　足（正面、側面）
第十八圖　榻足几二脚
第十九圖　漆香盆（斜面、背面）
第二十圖　漆盤（上面、斜面）
第二十一圖　蔵箱（全形）
第二十二圖　同　上（蓋表、蓋裏）
第二十三圖　密陀繪盆（十七枚ノ内第十四號）
第二十四圖　密陀繪盆（同第四號第一號）
第二十五圖　密陀繪盆（同第六號第二號）
第二十六圖　密陀繪盆（同第八號第七號）
第二十七圖　密陀繪盆（同第十二號第九號）
第二十八圖　密陀繪盆（同第十四號第十三號）
第二十九圖　密陀繪盆（同第三號第十六號）
第三十圖　密陀繪盆（同第九號細部）
第三十一圖　佐波理皿二枚（七百枚ノ内）
第三十二圖　佐波理皿七枚（七百枚ノ内）
第三十三圖　銀提子（側面、細部）
第三十四圖　磁瓶上部分
第三十五圖　同　上
第三十六圖　庖丁五枚（十枚ノ内）
第三十七圖　金銀箸一對
第三十七圖　和同開珎十五枚
第三十七圖　神功開寶一枚
第三十八圖　金銅剪子（表・背）
第三十九圖　錐一口
第三十九圖　刀子二口
第三十九圖　錯三口
第四十圖　鉋五口
第四十一圖　打鑓六口
第四十一圖　多賀禰四口
第四十二圖　銀平脫龍船墨斗
第四十三圖　白木倭櫃（四十六合ノ内）
第四十四圖　白木唐櫃（四十五合ノ内）
第四十五圖　赤漆唐櫃（六十二合ノ内）
第四十六圖　黑漆小唐櫃
第四十七圖　赤漆變形唐櫃

第四十八圖　黑漆密陀繪唐櫃（鳥草形）
第四十九圖　同　上
第五十圖　同　上　細部
第五十一圖　黑漆密陀繪唐櫃（彫鳥雲花形）
第五十二圖　同　上
第五十三圖　同　上　細部
第五十四圖　赤漆密陀繪唐櫃（雲兎孔雀形）
第五十五圖　同　上
第五十六圖　同　上　細部
第五十七圖　同　上　細部
第五十八圖　檜墨繪花鳥櫃
第五十九圖　同　上
第六十圖　同　上　細部
第六十一圖　檜彩繪花鳥櫃
第六十二圖　同　上
第六十三圖　同　上　細部
第六十四圖　鏁　子二具
第六十五圖　鏁　子三具

第一圖　紫檀小架

（縮寫約二分ノ一）

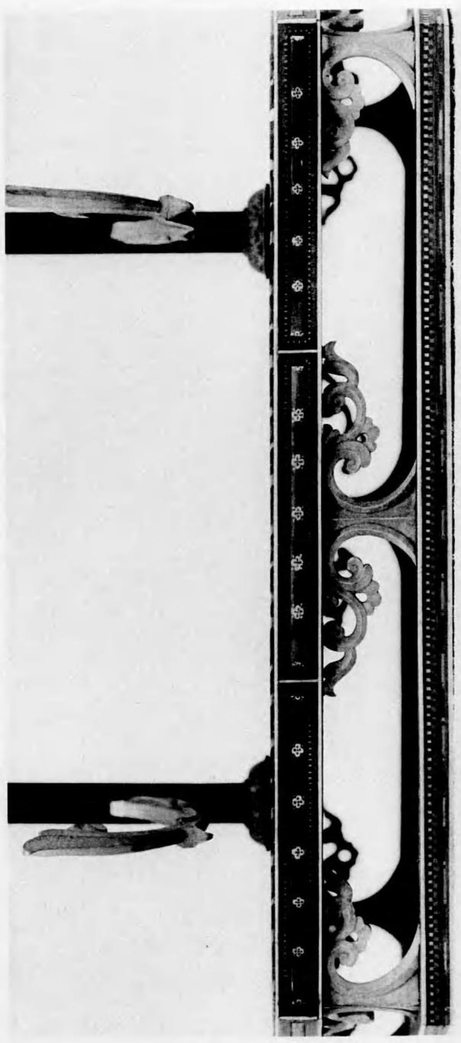
總高　四六・三糎　笠木長　三六・〇糎　貫長　一四・四糎
床高　四・二糎　床横　二九・三糎　床竪　一三・二糎

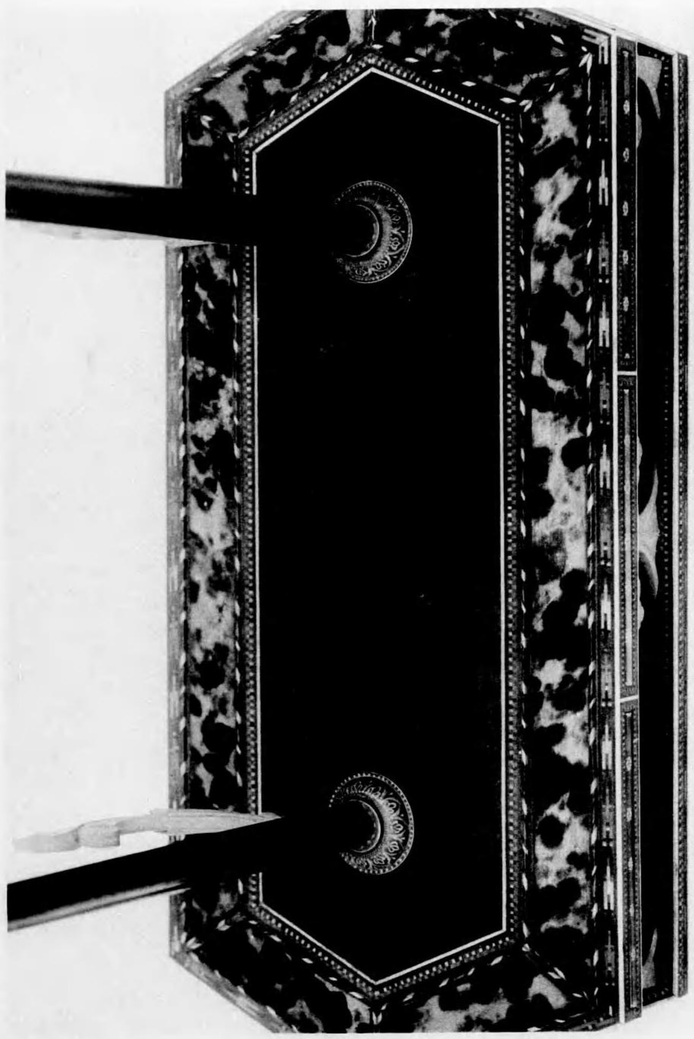
瑁瑇木畫の床上に牙莊鳥居形の小架を裝置せるもので、其の用途は未だ詳でないが、典雅なる姿と精緻なる技巧とは夙に識者の注目するところである。柱貫笠木は何れも斷面四花形の紫檀材を用ひ、之に白牙の彫刻をかざり且つ二雙の牙肘を出さしめ、床は長六角形に作り木畫を飾り白牙裝の床脚をつけ、輕快にして尙安定感を失はしめないやう工夫のあとを見る。

第二圖　紫檀小架細部

（原寸大）

前掲紫檀小架の床の部分をほゞ原寸大に出す。上圖は其の上面、下圖は側面を示す。柱脚の礎盤は共に紺牙を撥鏤して蓮蓮を顯はしたものであるが、其の瓣を一つは十瓣他を十一瓣に作るは當代技法の自由さを思ふに足る。床の天板は紫檀の二枚接ぎにして周圍には箔押珀瑇張の枠椽を繞らし界には木畫を用ふ。而して其の側面には紺牙又黄牙に小花文を撥鏤するものを中にして木畫を嵌め、臺輪にも同樣木畫を飾り、其の間唐草を透彫りせる白牙の束八個を立てゝ之を支ふ。束の白牙透明の技巧は特に鮮である。





第三圖　鳥毛貼成文書屏風

各高　一五〇・〇糎　　幅　五六・〇糎　　（縮寫約五分ノ一）

鳥毛貼成文書屏風は北倉納物中に十二扇あり、此の二扇も其の製作は彼に全く同じ。殊に向つて右圖の「正直爲心、神明所祐　禍福無門唯人所召」と讀まれるものは、北倉納物（第二輯第五十四圖參照）に殆んど同樣なものあり、以つて當時同一文書の屏風の多數製作せられたるを知る。只彼に比べて修補少く且つ「無」字に缺劃無きは注目するに足る。左圖の一扇は「唯行不易」の四字を篆書と楷書と二行にあらはしたもので、北倉中にも其の類を見ないが、彼の篆書屏風に篆書楷書を毎字反覆せるのと、計畫上の共通性あるは興味多い事である。

第四圖　鳥毛貼成文書屏風細部

（原寸大）

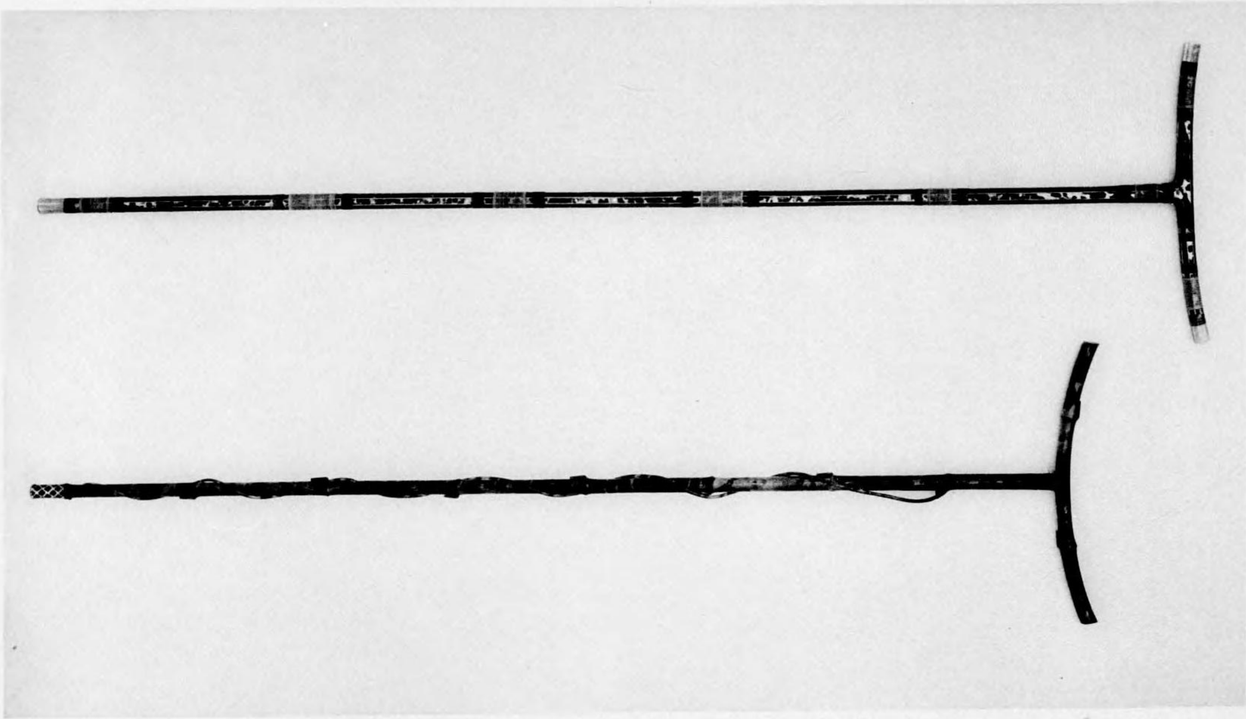
上圖は「禍福無門唯人所召」の「禍」の一字を、下圖は「唯行不易」の楷書「唯」の一字を、それぞ〳〵原寸大に示す。其の製作を見るに何れも白紙に地色を厚く塗り、薄墨にて文字の輪廓を双鈎體に書き、これに鳥毛を筆勢に從つて二列又三列に貼つて作る。但し前者は胡粉地に山鳥の羽根を貼り、後者は黄土地に雄羽根を用ひたものゝ樣である。

第五圖　瑁　瑇　杖

（縮寫約五分ノ一）

〔竹形杖〕　全長一二一・五糎　徑一・八糎　横木長三二・〇糎
〔八角杖〕　全長一三三・五糎　徑一・九糎　横木長二四・五糎

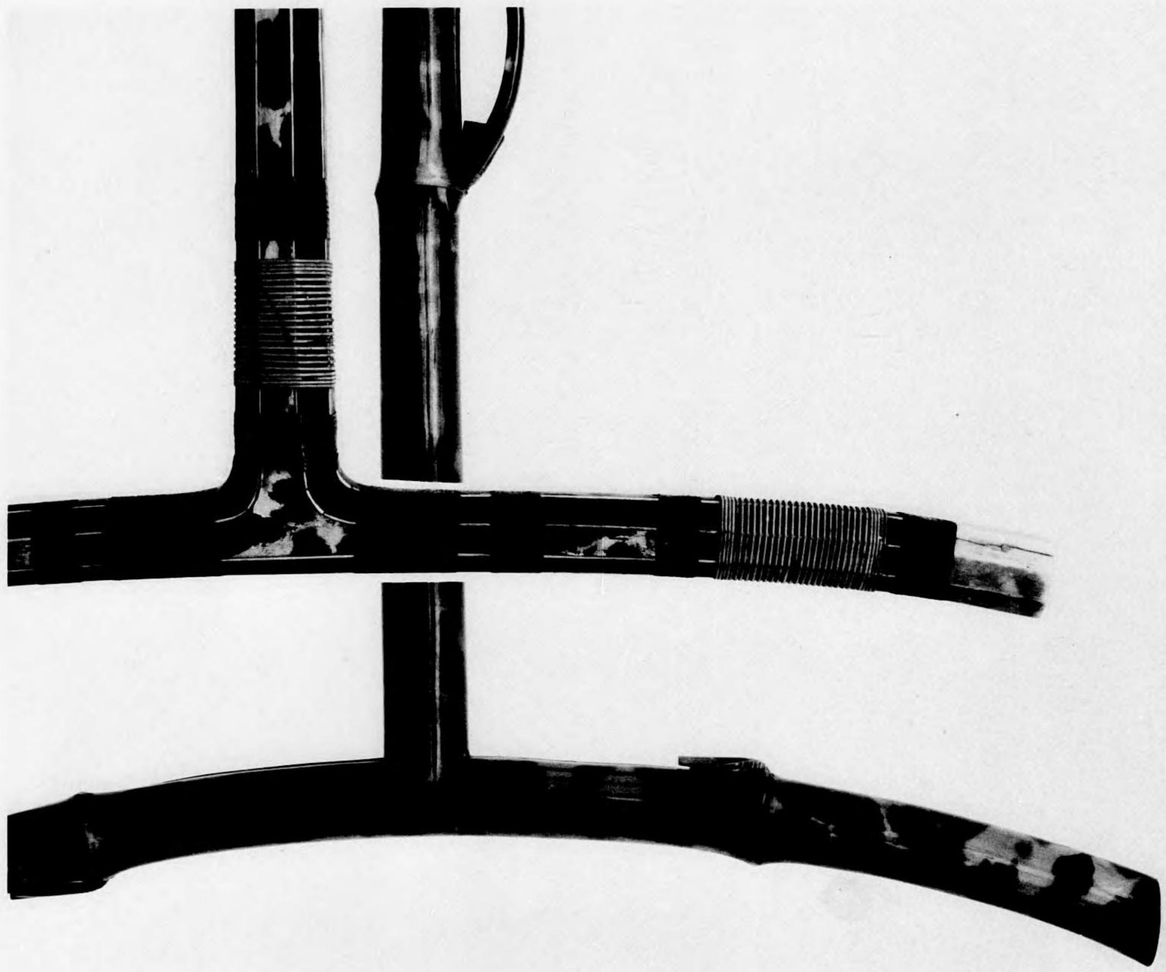
竹形杖は瑁瑇を曲げて竹管に作り、これを八段に接合して八節となし、上方三節の横木を加へ、且つ各節竹枝を殖えて、内の一枝を延して杖に纏はしたもの、八角杖は臺木を八角に作り、之に金箔と縁彩とを陪面に施し瑁瑇を被せ、籐と樺との段巻きをなしたもので、彼は意匠の妙に於いて優れ、これは絢爛の美に於いてまさる。



第六圖　珥瑳杖細部　其ノ一

（原寸大）

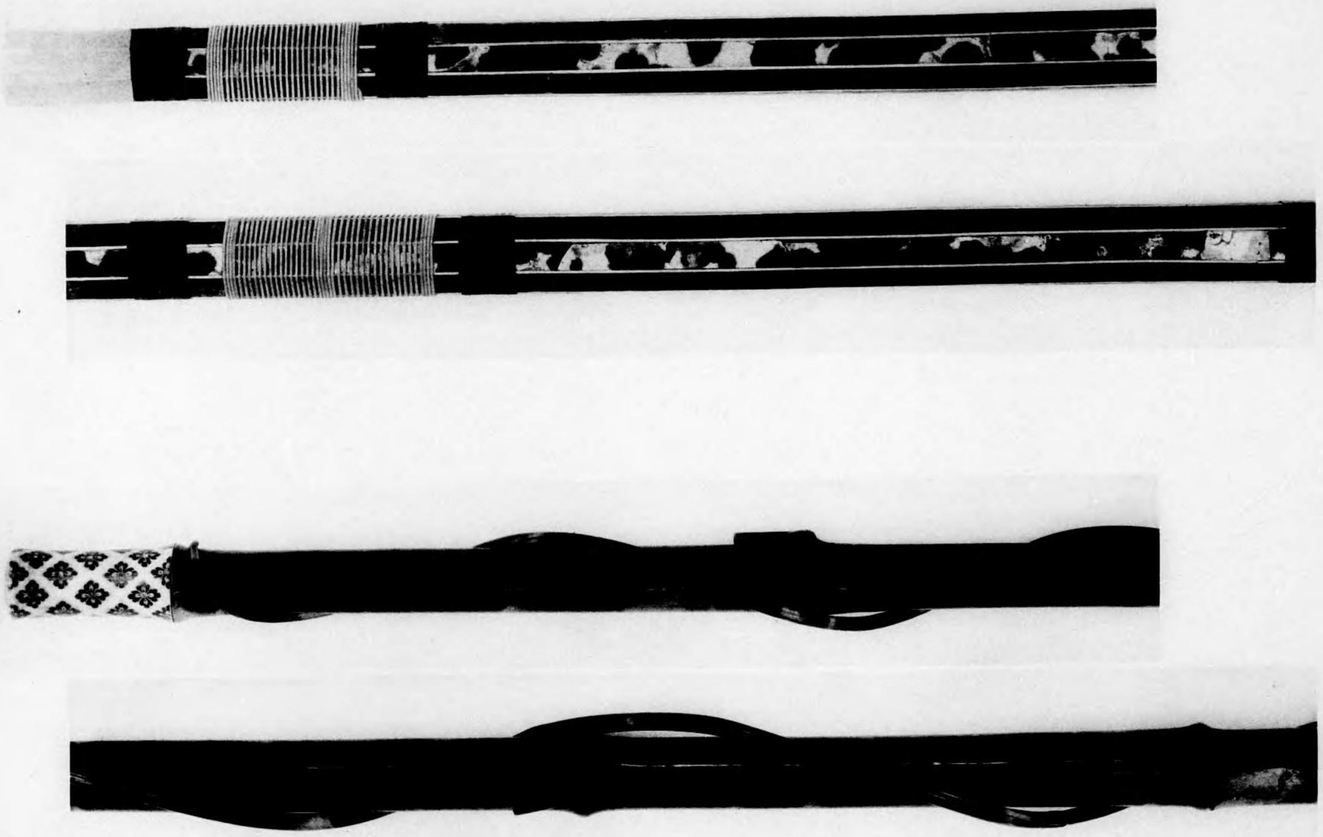
杖頭の部分を實大に示す。竹形杖の横木は全部珥瑳に作り、兩端の小口にまで荷珥瑳を嵌る ゟ八角杖は横木の端に白牙を飾り、且つ 所々に籐卷きと樺卷きを作り、白牙の界を施す。 地珥瑳亜の中央白き班の面は金箔 八角杖の部分、それに際る暗色の面は縦下地珥瑳のところ、 又段鞘きの白く見るは際、稍々黒き は樺鞘きの部分である。



第七圖　瑁瑇杖細部　其ノ二

（原寸大）

杖の中程と其の末端石突きの部分とを出す。竹形杖に於いて各節瑁瑇の合せ目を交互にかさねてゐるのと、竹枝を各節植込みしてゐる事とは先づ注目すべく、又石突きに撥鏤の紺牙を用ひ、而も其の撥鏤が普通の撥鏤と異り文様の周を削つて花文を浮彫してゐるのも珍らしい。八角杖の方は石突きに八角の白牙を嵌め所々籐と樺との段巻きをなすが、其の技法はすべて杖頭部のそれの反復である。

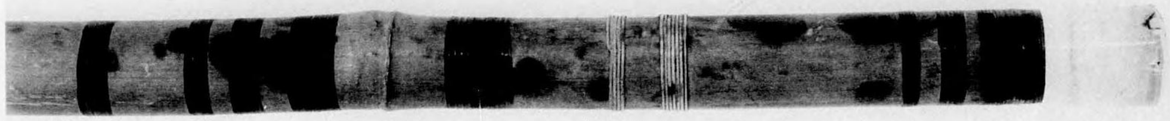


第八圖　假斑竹杖

（右縮寫約五分ノ一　左原寸大）

全長　一六〇・五糎　徑　二・三糎

四節ある女竹を選んで之に假斑を作り、其の各節には金泥の隈取りを施し、これに籐と樺との段卷きをなし、且つ其の杖頭と石突きとに水精を嵌めたものであるが、籐と樺との段卷きは、各節を中央にして其の上下に於いて殊に繁く作つてゐる樣である。



は後世の模倣、特に高貴なる御料となす。

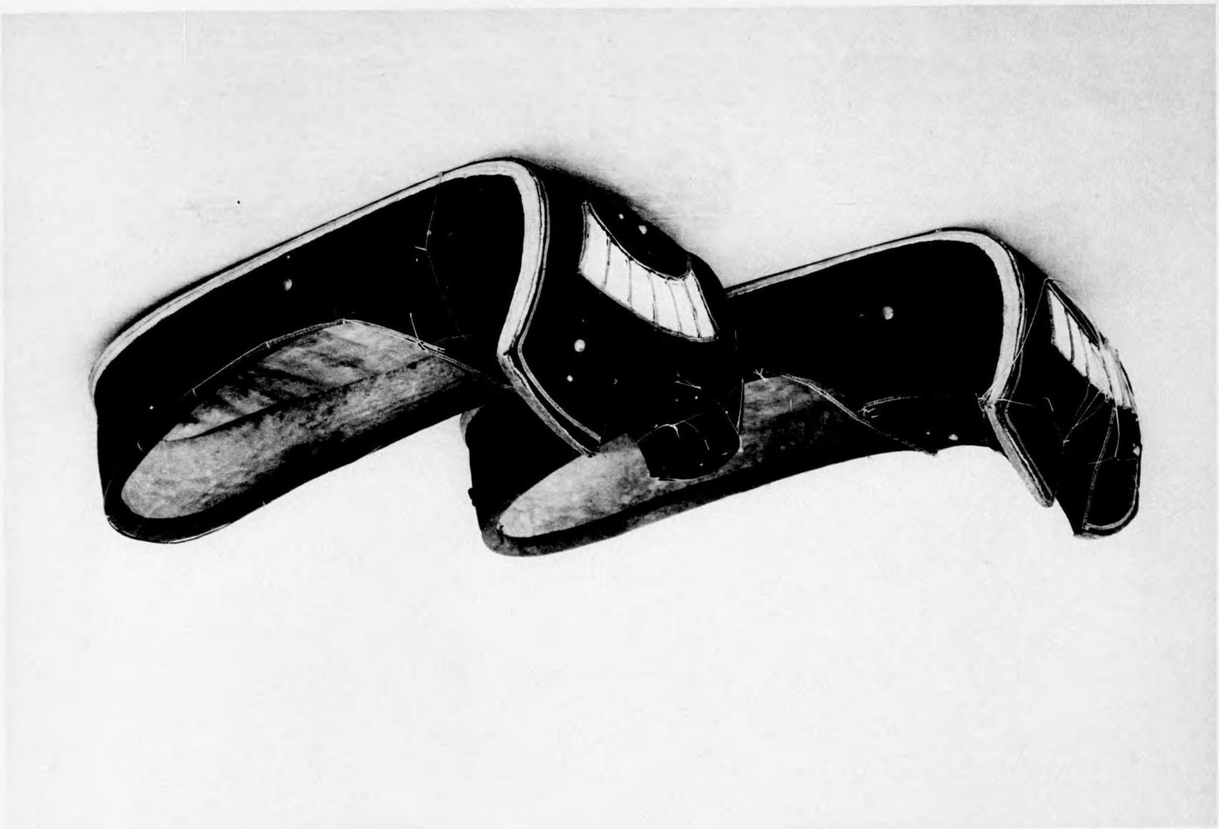
桂枚合せ表裏の鼻緒を縫ひ、しかも爪先、其の白革類を純金糸にて、所々縫目裏表をかくし、珠玉を散りて二の荘厳華麗、白革の爪先を飾りたる形しき雅びを極げ

第九圖　神御禮履

各長三二五糎
幅一四五糎
爪先高一二五糎

傳へて聖武天皇が御服に用ひ給ひしと伝へる。

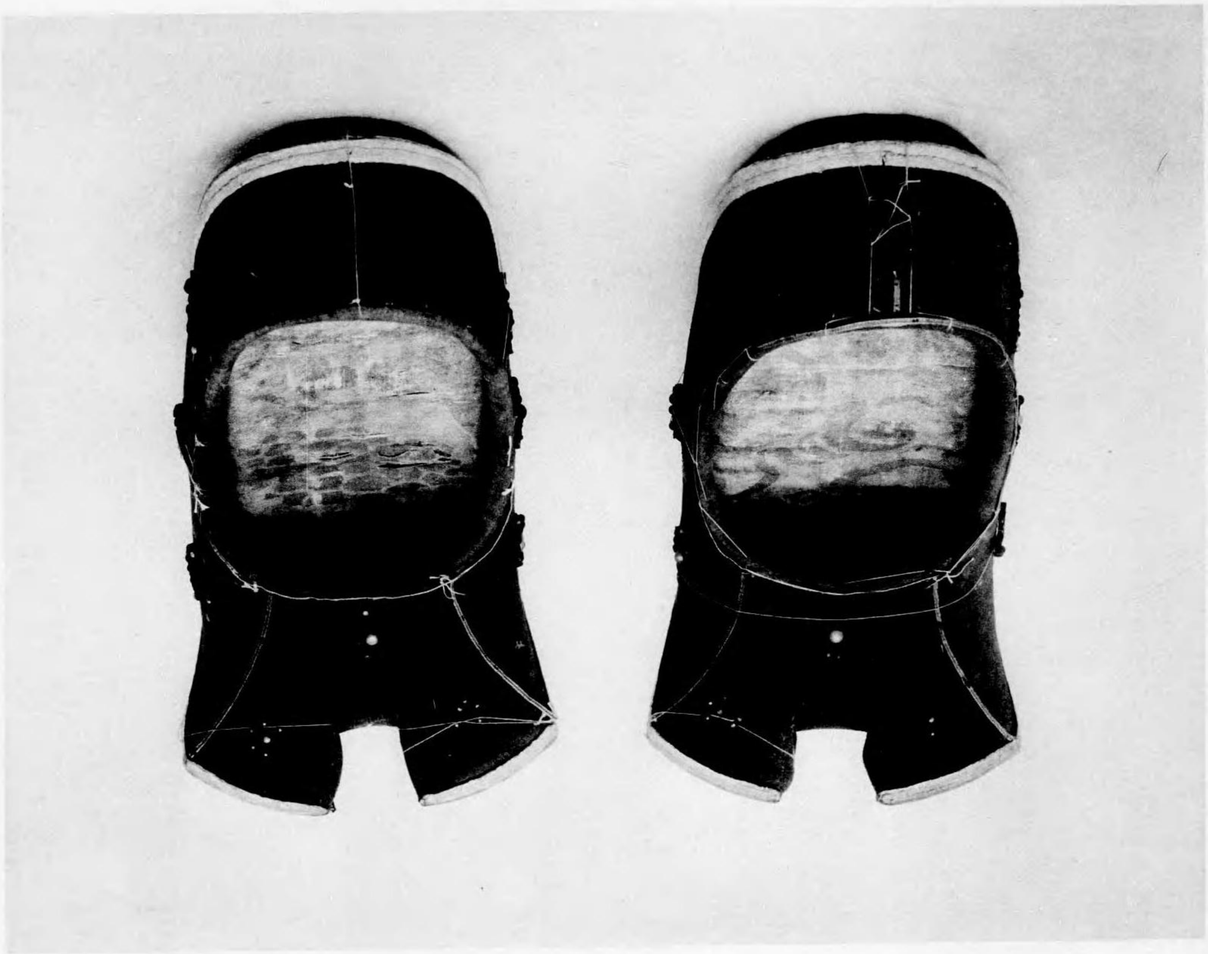
（縮約三分ノ一）



第十圖　朔御　鵜　脛（縮尺約二分の一）

御鵜脛の正面を示す。左右各〈同形に作られ、各爪先は二つに割れ、蹠は弧状に湾出し、甲の排皮には珠玉の銀蓋金具に嵌められたものが、更に糸にて島せられて立る。銀蓋の珠玉は中央に真白紅絹等を嵌めこれを縫つて鑑の珊瑚玉を配したものが多い。

脛丹部には別に鞠を入る。鞠は長三二〇糎幅約一〇〇糎あり、廊鑑の芯を白布に包み、之に大形鞠麻文白綾を被せしめたものゝ様である。



第十一圖　履

長二八〇糎　幅八八糎　爪先高一二糎

（縮尺約三分の一）

南倉納物中、履の爪先部は、大體前者の爪先が特別に作られたのに似て、其の爪先部に二箇の孔を穿ち、黒漆を塗り、前者に作られたる履の一般を示す。

今其の何れも略々同形で、前者の爪先部は山形を呈し、黒漆を塗り、内面白地に、白い絹の面白い革を張り、表面は黒地に、白い絹の面白い革を張り、表面は黒地に、白い絹の面白い革を張り、表面は黒

第十二圖　履

（縮寫二分ノ一）

鞋長　三〇〇糎　幅　八〇糎　厚　〇八糎

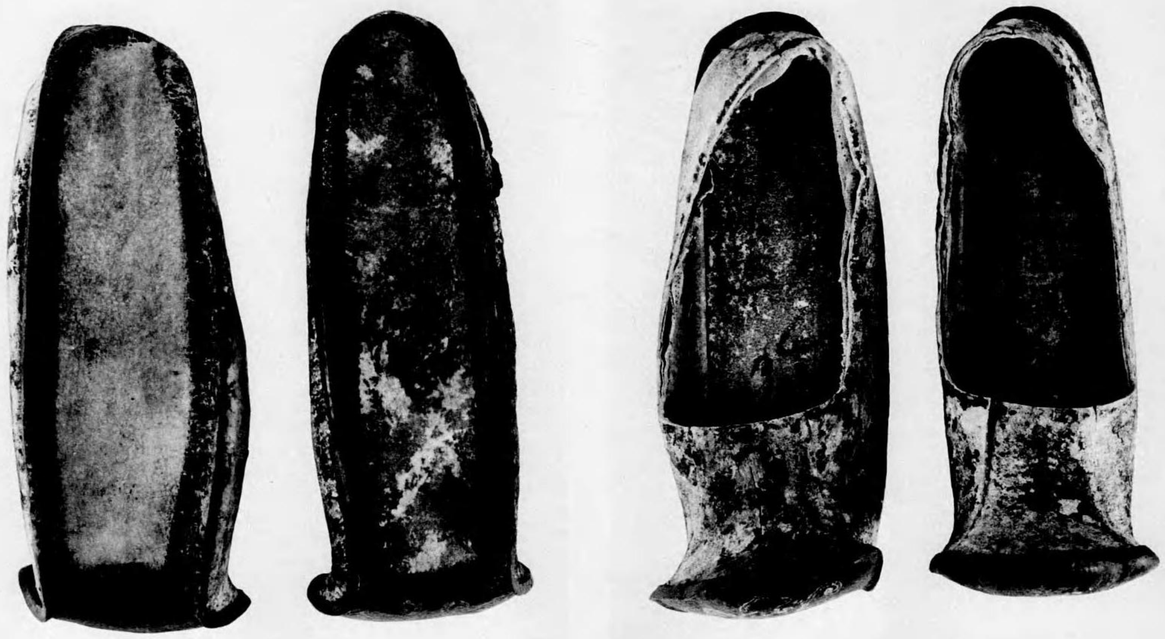
上圖は前掲履の側面、下圖は特に其の鞋を示す。上圖に於いて、履の側面の朽ちたる際より布目の見えるは、芯に麻布の用ひられてゐる事を察するに足る。下圖に示す鞋は、今の靴の敷皮に相當するものであるが、當時それに、蘭縫を重ね麻布で包んだものを使用してゐた事と、其の表に墨書して使用者の心覺えとしてゐた事とは、古人の生活も想像されて興味深い。

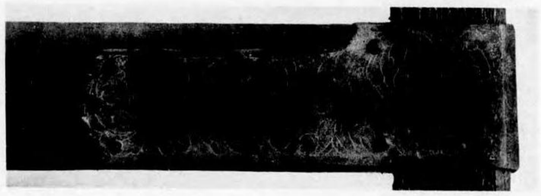
鞋の墨書には外に尙「皮」・「太」・「本」・「鳥」・「丁」・「比」「七」・「丙」・「五」・「乙」・「八」・「士」等の文字がある。

第十三圖　履

（縮寫二分ノ一）

覆を去つた履の内面と底背とを示す。履底は反轉せる爪先きまでを厚き一枚皮にて張り、爪先きと底の周圍には特に黒漆を塗る。甲は黒皮三枚を縫ひ合せて作り、麻布を芯にして裏に白革を張り、且つ口縁に覆輪をとつたらしいが、今覆輪の殘るものは無い。尙底内面に黒書して「丁少、上毛野老万呂、廿七日」「少丶凡人足廿九日」とある。型の大小と製作者と、製作日とを記したものと考へられる。





（六寸型）　耳金・床・脚・連・赤

金銅金具を飾る。床の村には新補も多いが、復原には大した無理は認められない。

今の脚子を大きくしたし様なもので、村は櫻木として柿を用い、之に赤漆を塗りたる。但し床の縁には新補も多い。背面の金具二個、脚に鋲

いては、共の縁る縁を未だ詳にしない。

とは共に飾物にして、他は共れに準じて伸版建補してある。

い。金具にも新補が多いが、床枠の角金具三個と小金具一個、背面の金具二個

第十四圖　赤漆櫻木胡床

床高二〇・〇糎　幅七八・五糎　奥行七〇・〇糎　背面八・五糎

（鎌倉時代ノ二）

（大分県）首金比羅神社

第十五図　木製寝台

（一）寝台脚高八寸五分

寝台板厚一寸

寝台板横巾二尺二寸、縦巾六尺四寸

第十五圖　赤漆八角床

（縮寫約四分ノ一）

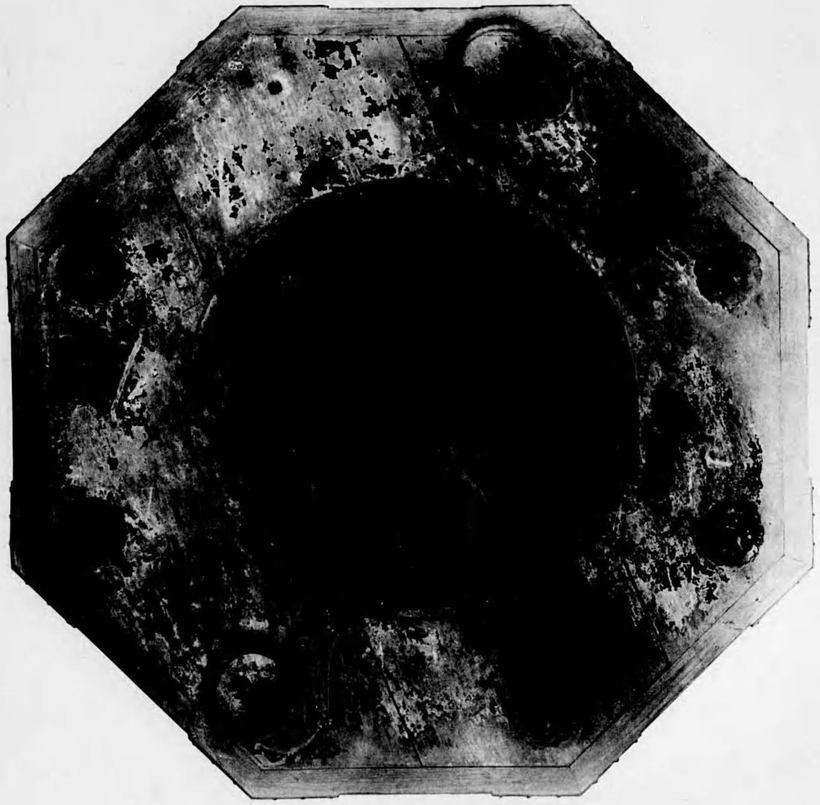
長徑　九六七糎　短徑　八九五糎　高　五四〇糎

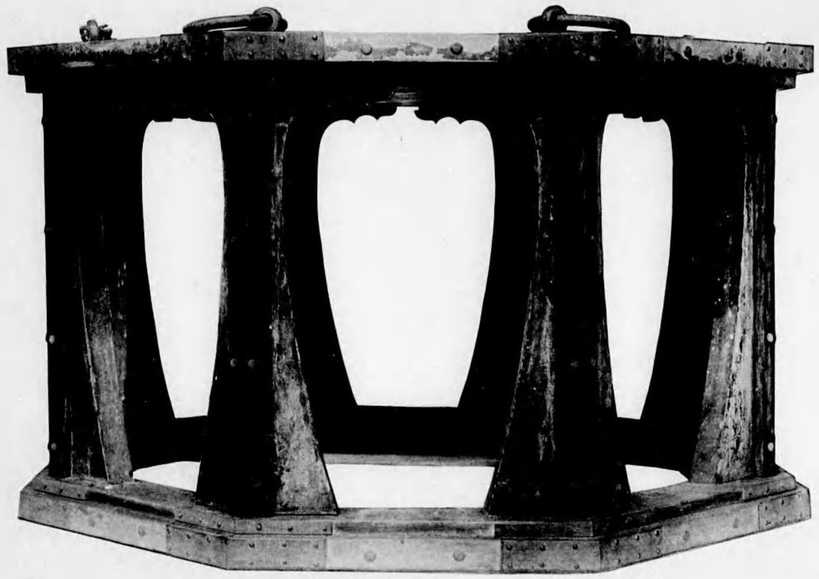
天板には中央に圓形を刳り周に框を繞らし、床脚には八個の香樣を透し、其の全體にわたり胡粉下地に赤漆を塗り、只香樣の小口のみ黑漆塗となす。又其の脚と框には金銅の丸鋲を打ち框角には二段に金銅金具を飾り、且つ天板上二双の鐶と二双の鏁とを着く。

第十六圖　赤漆八角床

（縮寫約五分ノ一）

前掲八角床の上面と其の側面とを出す。天板中央の刳り込みは周縁にて深さ約二粍あるも、中心に於いて幾分の隆起あるのみならず、其の縁に沿つて二個一對となつて小孔の貫通するもの十ヶ所を數へる事は最も注目すべきであるが、それが何の爲のものであるかは解釋し得ない。



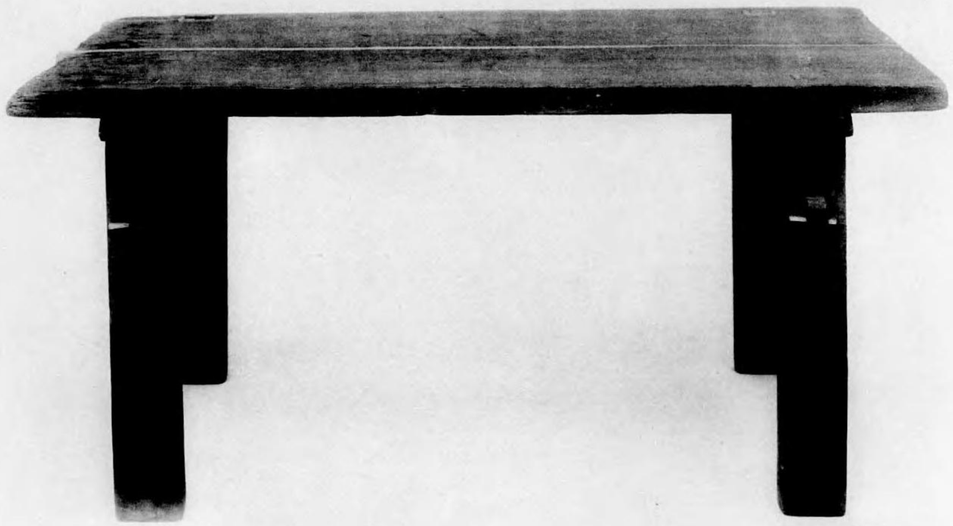


第十七圖　榻　足　几

（縮寫約五分ノ一）

長　一〇〇・五糎　幅　五七・五糎　高　四七・七糎

榻足几（しとあしのき）と讀む。榻（しと）とは牛車などにて轅の軛を支へ、又乘り降りの時の踏臺に用ふる小几を云ふ。榻足几とは其の几脚が榻のそれに似て外張りなるより、斯く稱せられるに至つたものである。御物中には此の几に屬するもの大小十數脚あり、其の構造は多少異るが、本圖の如く天板を檜の一枚板にて作り、其の四隅に枘孔を穿つて脚を支へ、且つ貫を通して之を補強せるものが最も多い。上圖は其の側面、下圖は正面を示す。



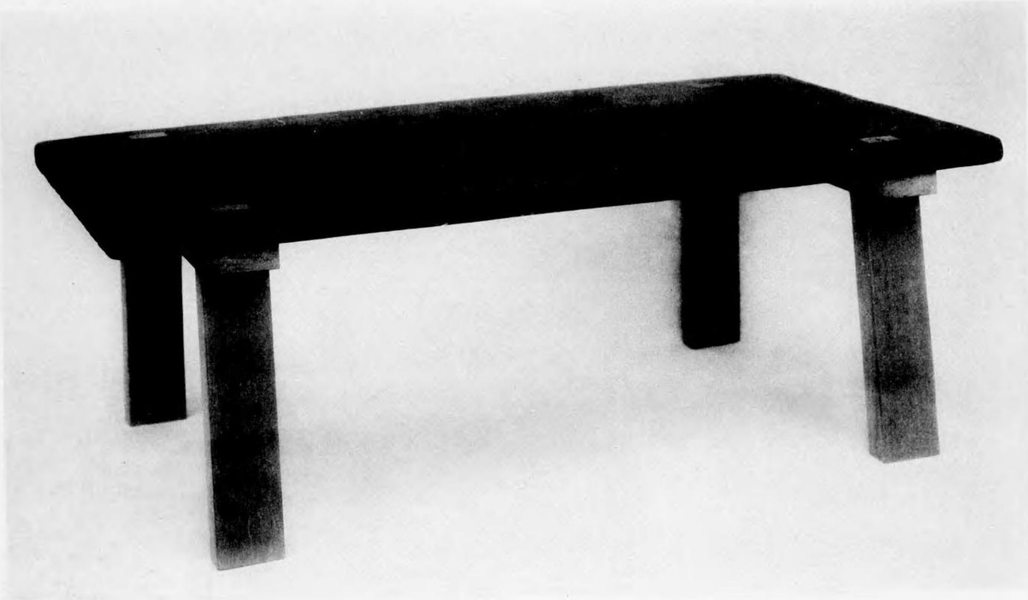
第十八圖　榻　足　几

（縮寫約五分ノ一）

〔上〕　長一二七・八糎　幅八七・〇糎　高六一・五糎

〔下〕　長一〇六・五糎　幅六六・〇糎　高三八・五糎

上几は前十七圖所載の几と同じ構造であるが、たゞ天板の小口に端喰みを入れ反轉に備へてゐる事に於いて異り、下几は貫を用ひずたゞ四脚のみを出す。此の手のものは概して丈の低い几に限る。



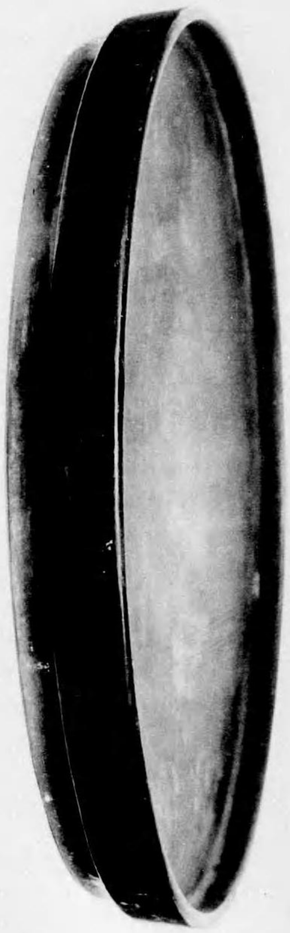
第十九圖　漆　香　盆

（縮寫約二分ノ一）

徑三八・九糎　高四八糎
香臺徑三六・三糎

木製黑漆塗りの盆で、周に幅〇・六糎高一・五糎の緣を繞らし、背に高さ一・五糎の高臺を作る。而して其の背面中央には針書にて「圖書寮」とあり、又其れに隣りて「香水」の墨書も殘り、以つて其の使途をも或程度察する事が出來る。

漆香盆底面針書並墨書



第二十圖　漆　盤

（原寸大）

徑　二〇・五糎　高　四・一糎　香臺徑　一九・〇糎

木製黑漆塗の器で、其の形は前掲香盌と甚だ似るが、只彼に較べて周縁の稍高き事と、内底に刳形を作る事とに於いて異る。而も其の刳形を見るに常の文様でなく、刳溝の一所に始つて一所に終るは、それが香印でも作るに用ひられたものではあるまいか。

第二十一圖　蘭

總高　九・五糎

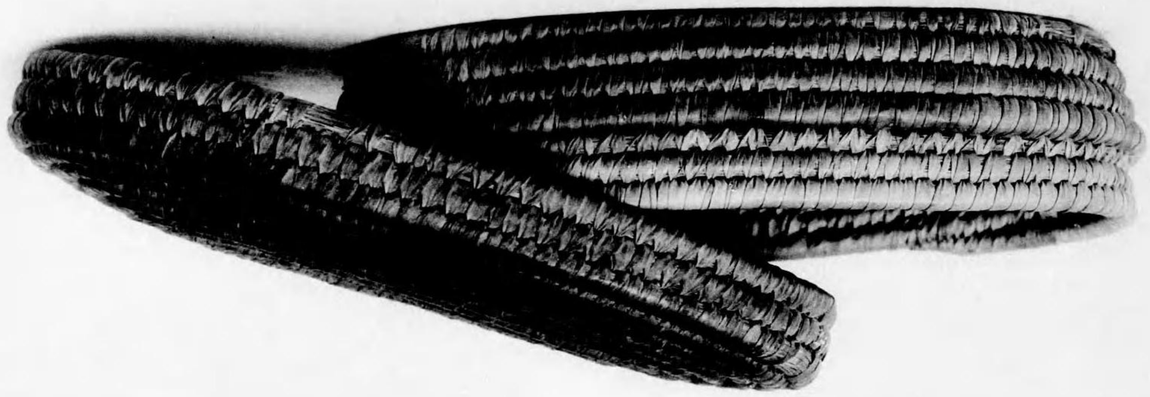
盂　長徑三・八糎　短徑一・七五糎　高　四・八糎

身　長徑三〇・五糎　短徑一・六八糎　高　七・四糎

箱（縮尺三分ノ二）

長楕圓形をなす蘭を束ねて芯となし、茎に編み上げて作る。かゝる芯をなす茎の葉にてかゝる。其の用途に就いては未だ詳でない。

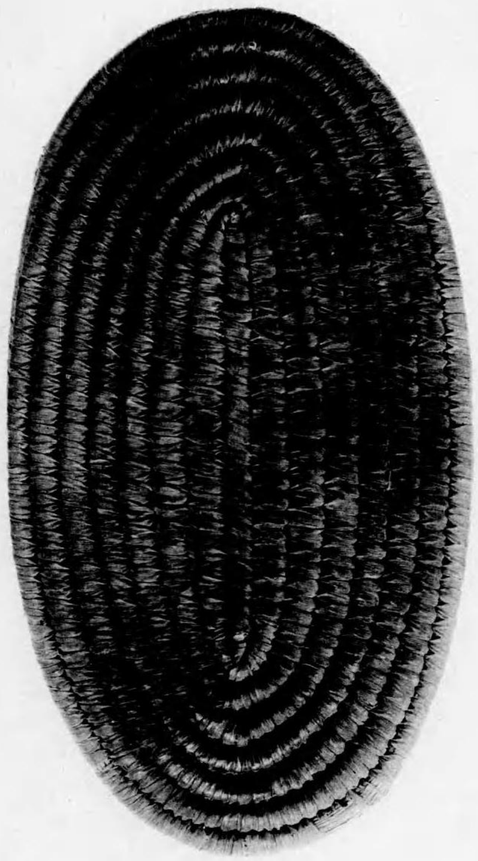
蓋は、之を棕櫚の盆で、

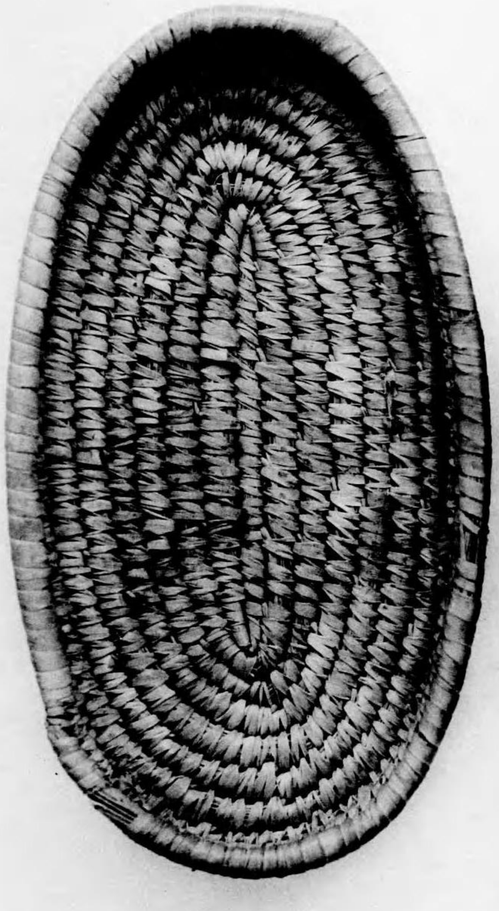


第二十二圖　蘭　　箱

（縮寫約三分ノ二）

前掲蘭箱の蓋の表背を示す。蘭草を芯となし棕櫚の葉もて之を渦卷狀に編み進めてゐる技法は、今の飯櫃入れと全く同じと云つてよい。以つて斯かる技術の據る處の遠きを思はせる。尙蓋裏には黃絁の殘片所々に殘り、もと黃絁の覆を存した事を知る。





第二十三圖　密陀繪盆

徑　三九・〇糎　高　五・〇糎

（縮寫約七分ノ三）

木製丸底の盆の表背を通じて先づ黑漆を塗り、更に其の內面には白密陀を塗りて之に黃土の文樣を描き、背面には黑漆地に赤密陀にて花文を顯はしたもので、同工のもの總じて十七枚を數ふ。內面黃土の文樣は各枚構圖を異にするが、背面赤密陀の文樣は皆一樣に中心に大花文を配し花瓣を廻旋的に覗かせ、花雲の圈帶を繞らし、圈外四至の蓮花唐草文と花卉文とを描く。

上圖は盆の側斜面、下面は其の背面を示す。

密陀繪盆實測圖

第二十四圖　密陀繪盆

（縮寫約七分ノ三）

〔上〕　徑　三九〇糎　高　五二糎

〔下〕　徑　三八九糎　高　五五糎

以下第二十九圖迄、盆内面文樣の比較的鮮明なものを選び掲ぐ。

上圖は盆全體に山岳を圖し、下方虎の驅るをあらはし、空に飛鳥を描き、下圖は山中の深淵に龍蟠り、林間に鹿の遁走するを寫す。

第二十五圖　密陀繪盆

（縮寫約七分ノ三）

〔上〕　徑　三八・八糎　高　五三糎

〔下〕　徑　三八・三糎　高　五四糎

上圖は水に面して草菴あり、菴中机を置いて書を繙き、又水中鹿の渡渉するをあらはし、下圖は樹下に古人の悠歩する時、草中より兎飛出し、樹上の小鳥の驚いて飛散するを描く。

一、[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

(二) 第[illegible]人[illegible]　[illegible]

(三) 第[illegible]人[illegible]　[illegible]

第二十六圖　密陀繪盆

（縮寫約七分ノ三）

上圖は中央に菖蒲を描き、其の脇に飛鳥と花樹とを顯はしたものらしく、下圖は中央に鹿の驅走するを圖し、左右に花木を配した樣であるが、何れも修補多くして原初の圖樣は確智し難い。

第二十七圖　密陀繪盆

（縮尺七分ノ三）

〔上〕　徑　三九・〇糎　高　四・四糎

〔下〕　徑　三八・八糎　高　四・七糎

上圖は花園の中宮殿の睦み遊ぶところを描き、下圖は叢林中孔雀の尾を擴げ羽ばたく狀を寫すが、それらの中に撫子・萱・百合・藤等の花が、かなり寫實的に表はされてゐる事も、注目すべきである。

第二十八圖　密陀繪盆

（繪寫約七分ノ三）

〔上〕　徑　三九・〇糎　高　五〇糎
〔下〕　徑　三九・二糎　高　五五糎

上圖は中央に花枝に乘る花喰ひ鳥を大きくあらはし、其れを繞つて二双の含綬飛鳥と花枝文とを廻旋的に描き、下圖は中央に大花文を作り其の四隅に又二双の飛鳥と飛雲とを配す。下圖は稍鮮明を缺くが、上圖は密陀繪盆中保存の最も良好なものである。

(五)　鶴　出光美術館　（　）
(六)　鶴　出光美術館　（　）

第二十九圖　密陀繪盆

（縮寫約十分ノ三）

〔上〕　徑　三八八糎　高　五〇糎
〔下〕　徑　三八三糎　高　五五糎

上圖は中央に大唐花文を作り、それを繞つて花喰鳥四羽を廻旋的にあらはしたものであるが、其の四羽の鳥の姿態を一一變化させてゐるのは注目するに足る。下圖も亦中央に唐花文を作るが、それを繞つて配するに或は杖をもつ仙人、或は鶴、或は笙を奏する天人等をもつてする事他に例を見ない。

第三十圖　密陀繪盆細部

（原寸大）

前掲第二十七圖の孔雀を原寸大に撮す。尾羽根の捌き、翼を伸へ胸を張る姿態等、小品乍ら尚雄大な氣宇の漲るを感ずる。

第三十圖　古墳發掘鏡背面

第三十一圖　佐波理皿

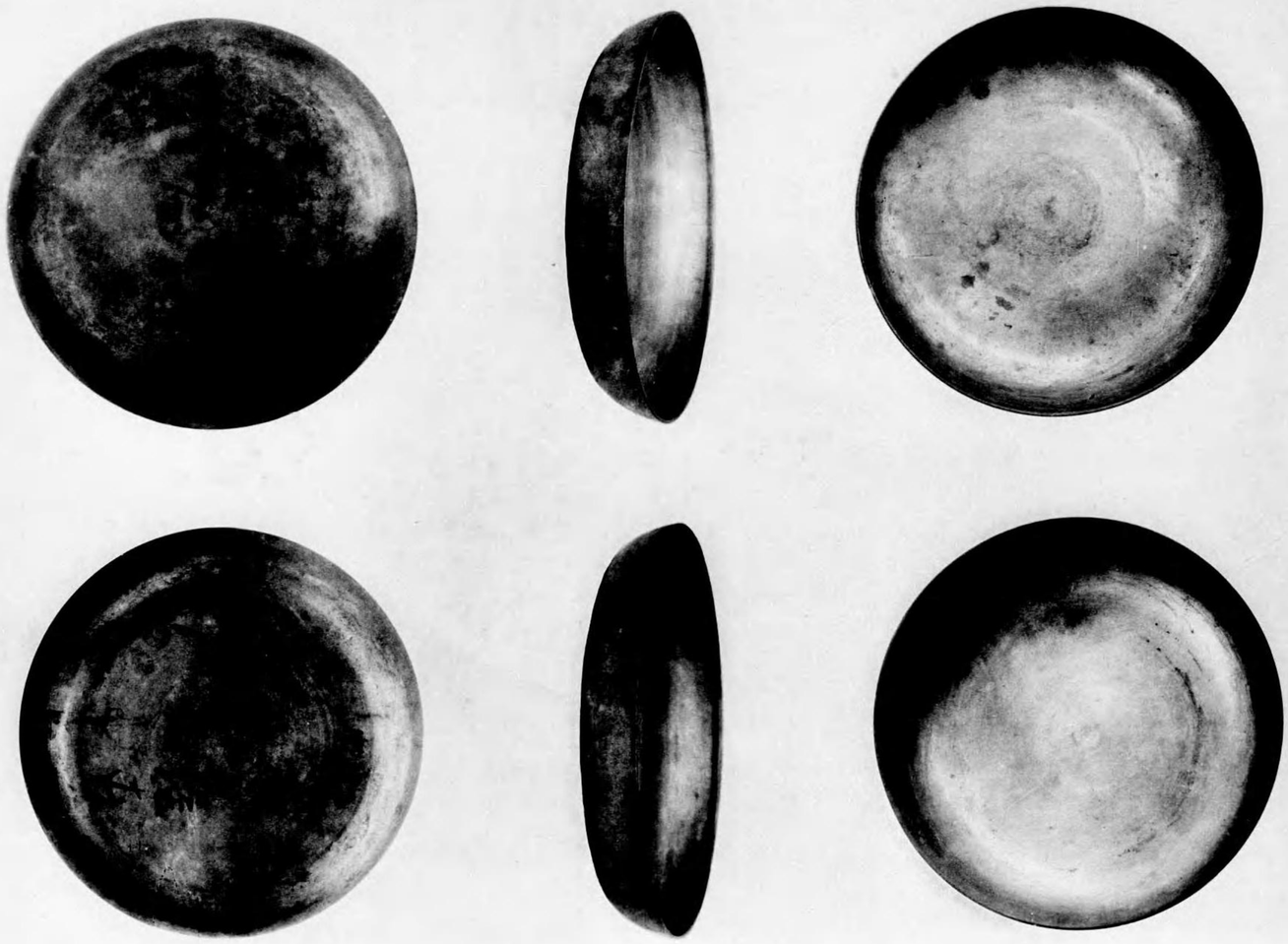
（縮寫約二分ノ一）

〔右〕　徑　二〇・〇糎　高　三・二糎　重　三一五・〇瓦

〔左〕　徑　一九・八糎　高　三・七糎　重　三一〇・〇瓦

佐波理皿の現存するもの總て七百枚を數ふ。之を其の形によつて内譯すれば、厚手皿八十二枚、平底皿三百五十五枚、丸底皿百七十四枚、緣反皿八十五枚、有環皿四枚となる。其の使途は必ずしも一樣であつたとも思はれないが、これが内面に金泥・綠青・群青・朱・胡粉等の滓の附着するものゝ相當多數ある事より、大部分が畫工用具として使用されたものではあるまいかと思ふ。

圖は金泥の附着するもの（右）と綠青の滓あるもの（左）とを取つて其の内面側面背面を示す。



第三十一圖　鉢　盤　碗　皿　（縮尺三分の一）

（上）　第一次大戦　第一次世界　第一次世界
（下）　第一次大戦　第一次世界　第一次世界

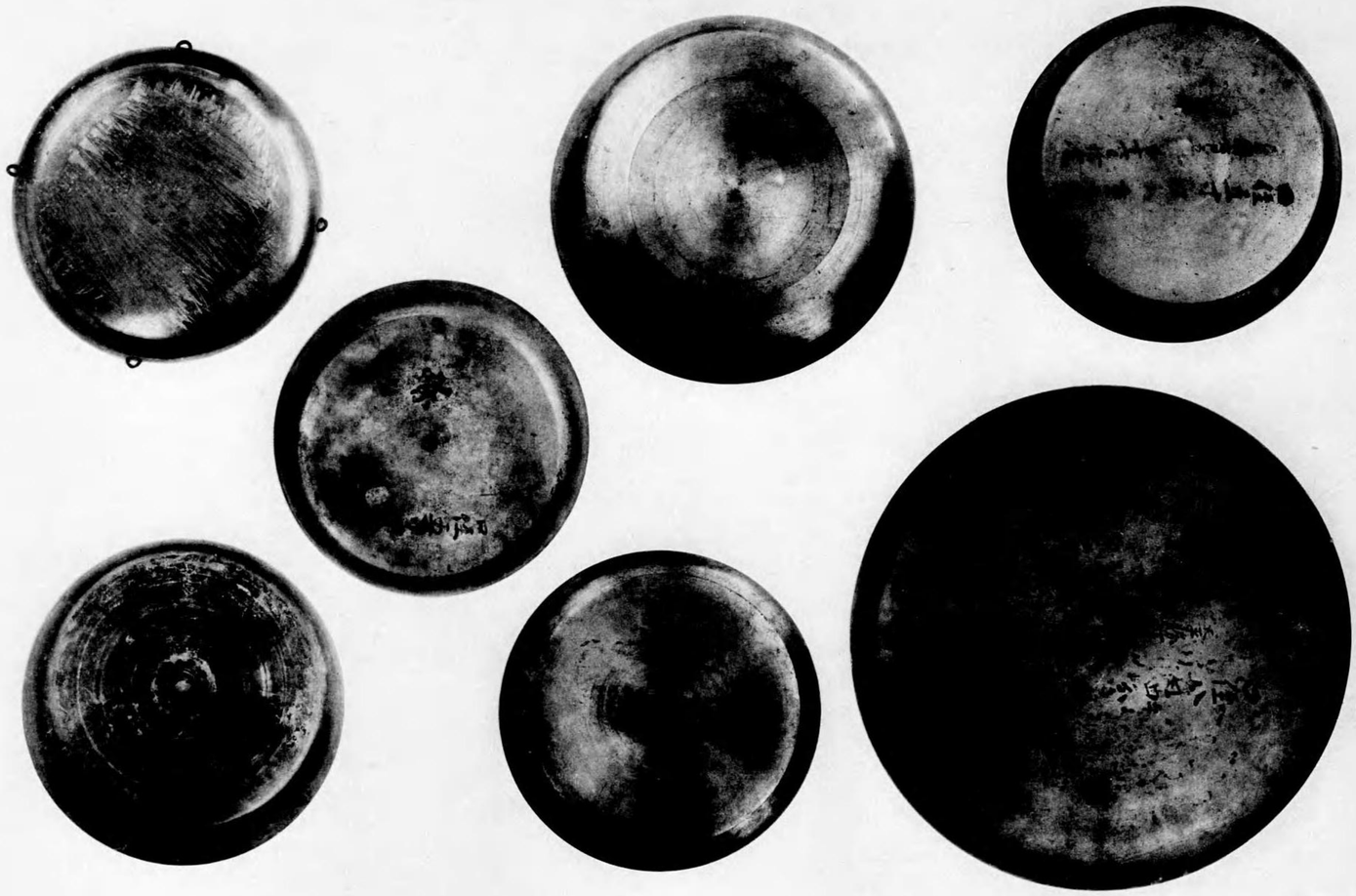
上段の四枚の写真は、ウェッジウッド社の陶器の中から、第一次大戦と第一次世界大戦の間に作られたものを選んだ。

下段の四枚は、第一次世界大戦の後に作られたものである。

第三十二圖　佐波理皿

（縮寫約三分の二）

| | | |



第三十二圖　法　器　類　目

（原寸大）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

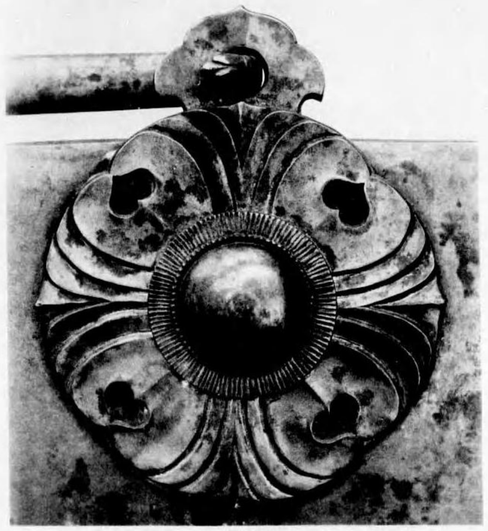
第三十三圖　銀　提　子

（上縮寫二分ノ一　下原寸大）

口徑　四八・五糎　深　二三・三　重　五四五〇・〇瓦

銀槌製深鉢形の器に、同じく銀製提梁を着けたもので、其の形は今の提子に甚だ似るが、但し注口を作らない。提梁は其の大さ容器の半圓に相當し端を蕾形に作つて曲げ、之を雞頭狀の兩耳に取り付く。而して其の雞頭耳の容器への接合には別に四瓣大花文の座金を用ひ鋲止めしてゐる。

上圖は銀提子の全形を示し、下圖は其の耳の部分の內外を撮す。器の內外面に幽に察せられる槌痕は本器の製作過程を思はせて興味深い。



第三十三圖　鐙　鏡　午

口徑　四八五糎　厚　三三糎

第三十四圖　磁　瓶

（縮寫約二分ノ四）

口徑　一八・七糎　總高　四二・〇糎

胎土には白粘土を用ひ、其の全體に亘り白色釉を先づ施し、更に緣釉を斜格子狀に塗つたもので、燒成時の釉藥の垂れは巧まざる濃淡と潤ひとを見せてゐる。口緣に破損のあるは惜しいが、肩が張り香臺に踏張りを持たせて悠然たる姿には、犯し難い氣品と威嚴がある。

尙頸と肩との接觸に小段があり、香臺の形の異樣なるは注目するに足る。

第三十四圖　鐘

口徑　一八・五糎　總高　四二・〇糎

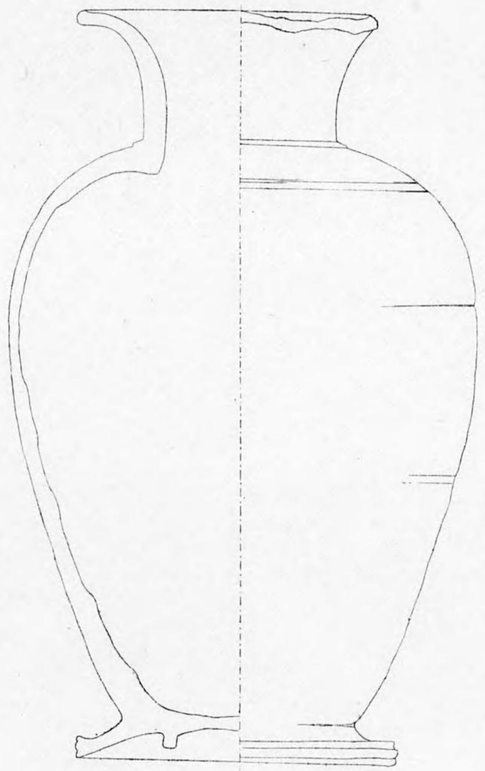
（第一・七・八・四）

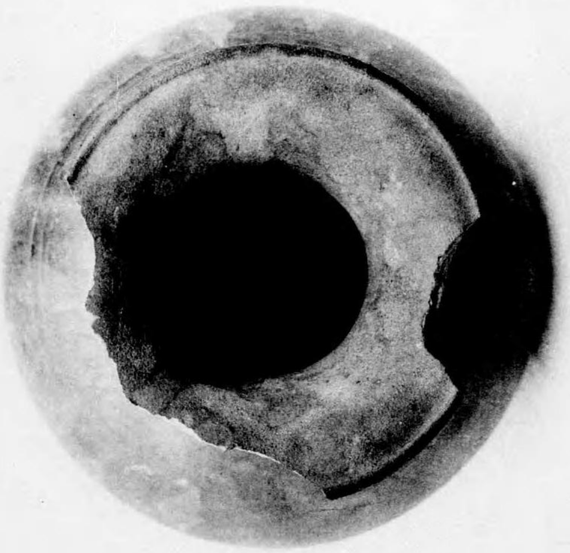
第三十五圖　磁　瓶

（縮寫約七分ノ四）

口徑　一八七糎　底徑　一八〇糎　胴徑　二五·八糎

前掲磁瓶の口縁部（上）と、底面（下）とを示す。朝顔形に開いた口縁を特に蒲鉾形にしてゐるのは、些細な事ながら製作者の周倒な注意を思はせるものと云へるが、底中央に圓圈を造出してゐるのは他に類例が無く、何の爲のものか見當がつかない。





第三十六圖　庖　丁（十枚ノ内）（縮寫四分ノ三）

總長　三八・三糎乃至四一・三糎　刃長　二二・七糎乃至二五・七糎
刃幅　一・四糎乃至一・七糎　柄長　一四・六糎乃至一六・二糎

今の刺身庖丁に似て、身は鐵製片刃で細長く、柄には欅製墨漆塗のものを用ふ。然し其の身と柄との取り付けには、刃本に鐵輪を嵌めたものを先づ柄に差し込み、輪と身との間を木片にて埋めて其の脱出を防いである。又柄の側面乃至小口には銘識の存するもの多く、向つて右端のものには側に「吉」小口に「一口」、次は側に「一一一一」、次は側に「吉」小口に「吉物」最後の二口は各小口に「吉物」の針書がある。

（縮寫約三分ノ一）

庖丁柄小口（原寸大）

金銀箸

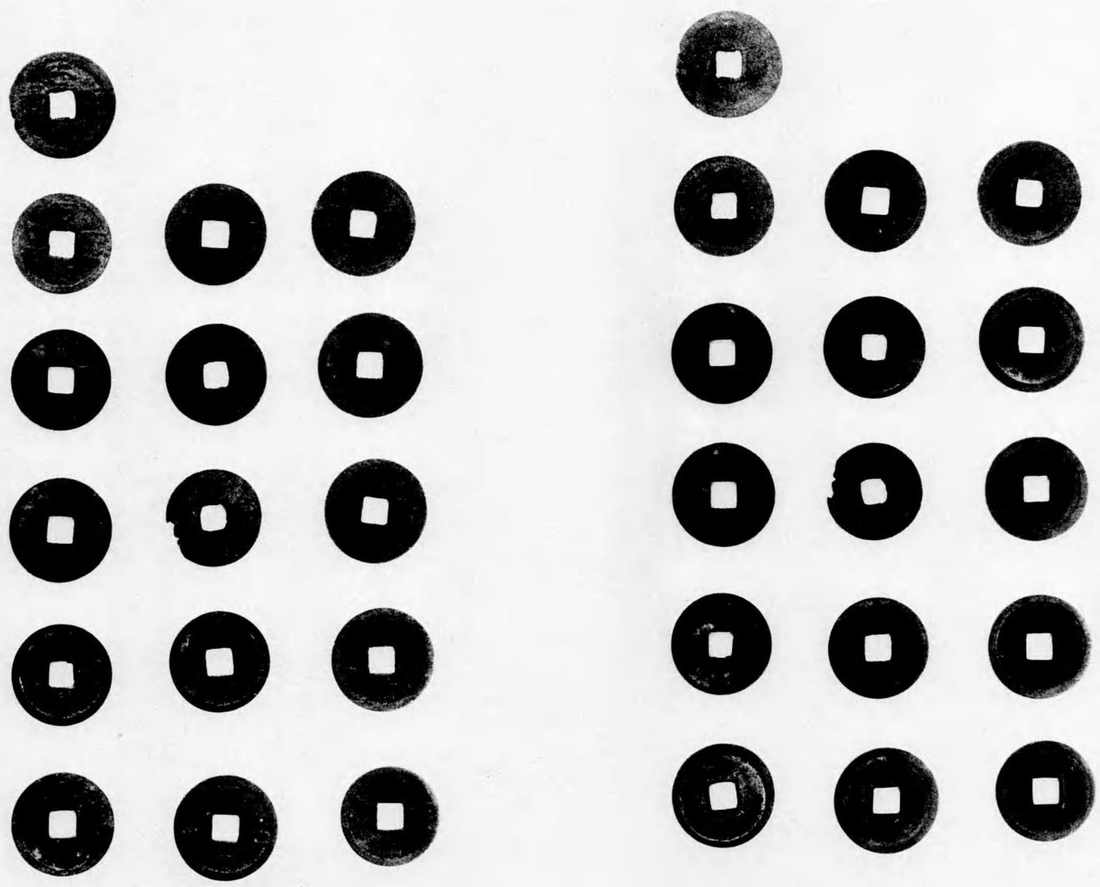
長　二五八糎　重　七四・四瓦

斷面圓形、銀臺に鍍金を施したもので、本と先が細く中程が稍太い。

第三十七圖　和同開珎　十五枚
　　神功開寶　一枚

（原寸大）

和同開珎並神功開寶の現存するものゝ多くは發掘錢であるが、これは傳世せる古錢として最も信用出來るものと云ふ事が出來る。上圖は字面を寫し下圖は其れに對する素面を示す。和同錢は何れも「並和同」と稱せられてゐる最も普通のものであるが、錢文の鮮明なる點で珍重すべく、神功開寶は錢文の明了を缺くが所謂長刀神功と稱せらるべきものであらうか。



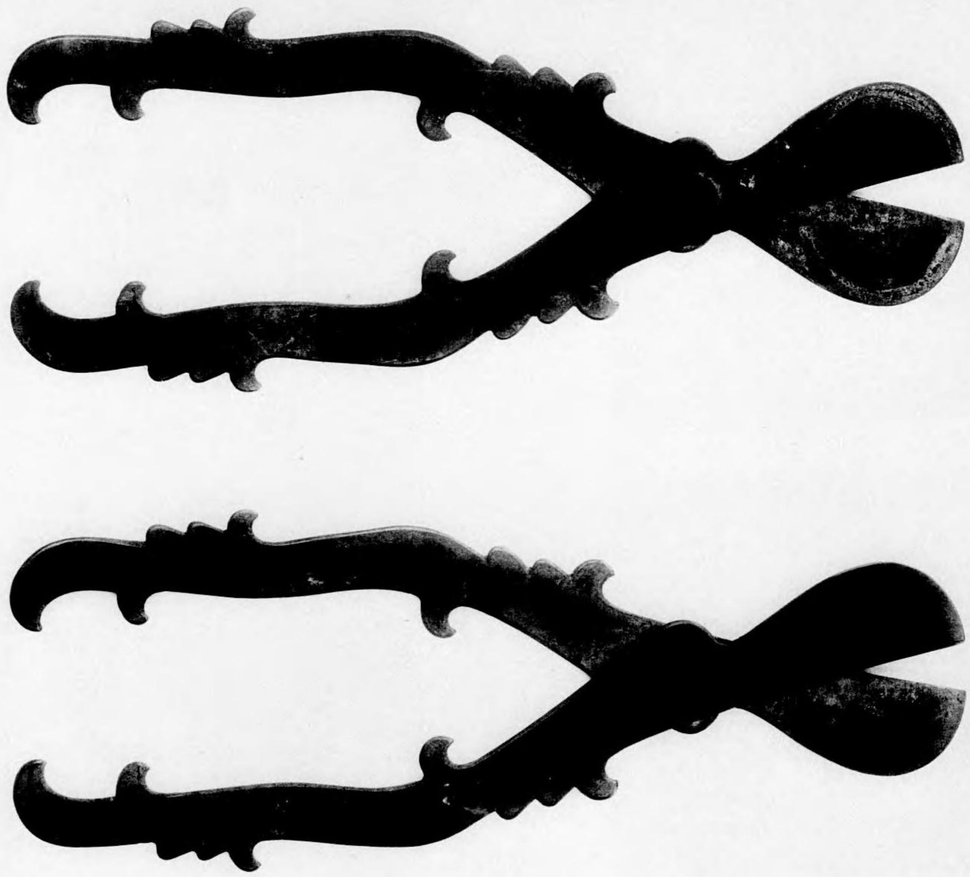
第三十八圖　金　銅　剪　子

（原寸大）

長　二二六糎　厚　〇二糎　重　一五五〇瓦

裁縫用の握鋏に似す、花木等の剪定に用ふる所謂花鋏に類し、銅製にて兩面鍍金を施し且つ把に特殊の刻形を作る。形態甚だ奇古、我國に現存する鋏の最古の遺品と稱すべきである。

尙剪刄の部分に徑約三・三糎の半圓形のものを蠟付けした樣な痕を見るが、其れが何の爲のものかは明かで無い。



第三十九圖

錐　一口　（縮寸約四分ノ三）

總長　一七五糎　柄長　一六五糎

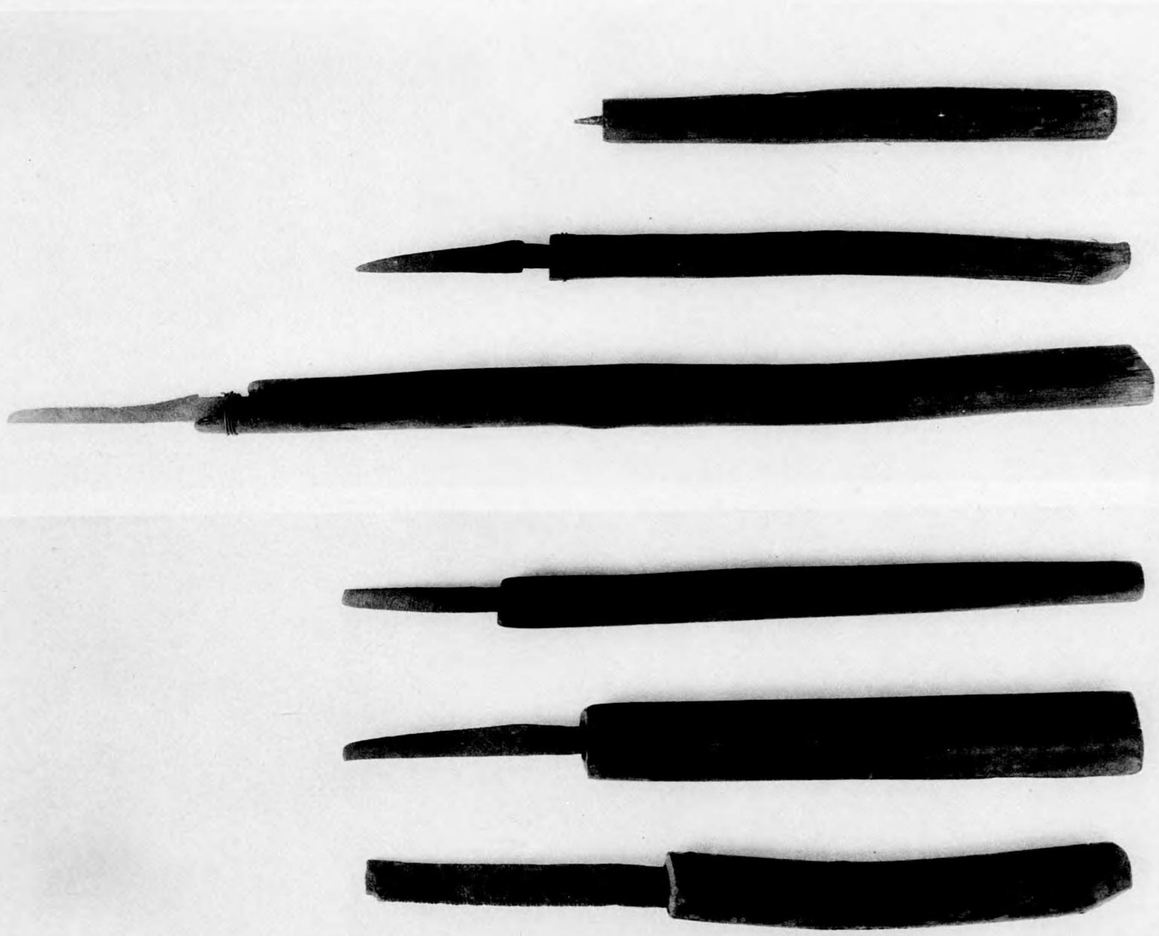
刀子　二口　（縮寸約四分ノ三）

〔二號〕　總長　二五・〇糎　柄長　一八・五糎
〔一號〕　總長　三七・〇糎　柄長　三〇・七糎

錯　三口　（縮寸約四分ノ三）

〔二號〕　總長　二五・八糎　柄長　二〇・六糎
〔二號〕　總長　二二・五五糎　柄長　一七・七糎
〔三號〕　總長　二四・五糎　柄長　一四・八糎

圖版向つて右より錐一口刀子二口錯三口を示す。錐は鏨を損じて今本の部分のみ僅に殘るが、其の柄への取り付けは込みを細いて差込んだものらしい。刀子は何れも片刃で込みは割合に長く、柄には丸木を餘り加工せずに用ひてゐる。錯は三口とも比較的厚き鋼鐵板を用ひ其の兩面に錯目を作る。錯目は只の斜線を重ねたのと、格子にたてたのと兩樣あり格子目は三號錯に於いて殊に顯著である。



第三十七圖　鉄　口

（縮尺三分の一）

（縮尺三分の一）

鉄　口　二

（縮尺三分の一）

（縮尺三分の一）

鉄　口　三

（縮尺三分の一）

（縮尺三分の一）

〔三〕　鉄　長二五・〇糎　　鉄　一〇・〇糎
〔二〕　鉄　長二五・〇糎　　鉄　一八・〇糎
〔一〕　鉄　長二五・〇糎　　鉄　一六・〇糎

鉄　口　四

（縮尺三分の一）

（縮尺三分の一）

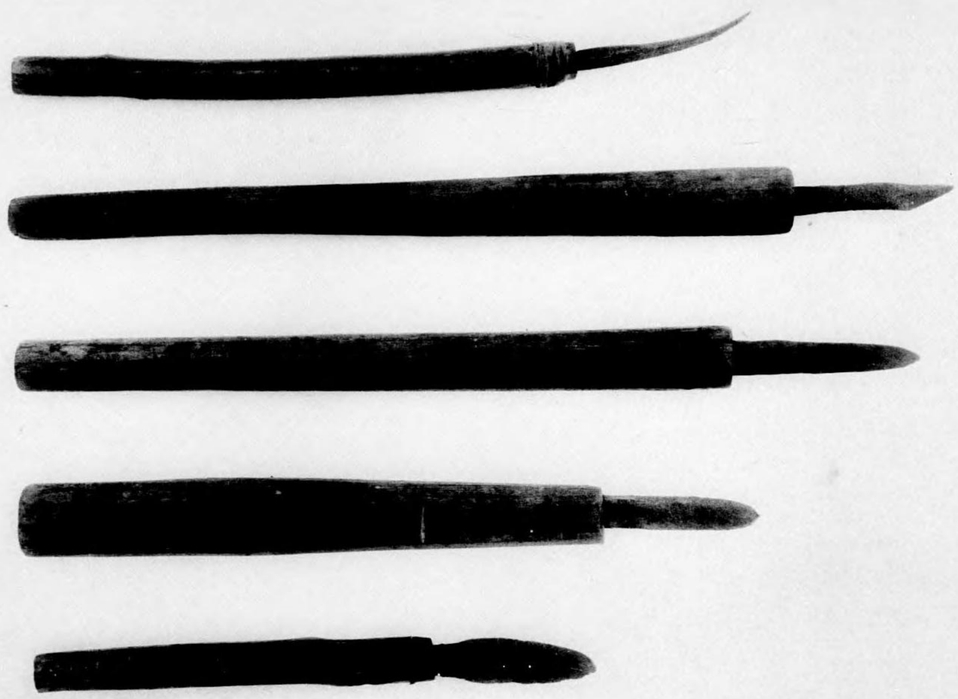
〔三〕　鉄　長二五・〇糎　　鉄　一六・〇糎
〔二〕　鉄　長二五・〇糎　　鉄　一八・〇糎
〔一〕　鉄　長二五・〇糎　　鉄　一〇・〇糎

第四十圖　鉋　五口

（縮尺約四分ノ三）

〔五號〕	全長	一八・〇糎	柄長	一二・七糎
〔四號〕	全長	二三・七糎	柄長	一八・六糎
〔三號〕	全長	二八・九糎	柄長	二三・〇糎
〔二號〕	全長	三〇・三糎	柄長	二五・二糎
〔一號〕	全長	二四・〇糎	柄長	一八・二糎

所謂「造り鉋」と稱するもので、古墳よりの發掘品中にも稀に見るが、傳世の遺品としては最古のものである。柄は檜杉ノロモチ等の材を或は例り或は皮付きの儘用ひてゐるが、東大寺の大佛殿を始め、木彫佛像・天蓋・厨子其の他の工藝品もかうした工具で作られたかと考へると、當時に於ける素朴な工人の生活が思ひやられる。圖版の右二口の柄に見られる「一一一一」「一」の例り傷は所有者の心意をであらふ。



後四十図　鏃　正　口　（縮尺不定）

[三]　全長　三寸四分　重量　五匁
[四]　全長　三寸三分　重量　五匁
[五]　全長　三寸三分　重量　五匁
[六]　全長　三寸三分　重量　五匁
[七]　全長　三寸三分　重量　五匁
[八]　全長　三寸三分　重量　五匁

図版「後四十図」は、鏃の実寸大写真である。[三]、[四]、[五]、[六]、[七]、[八]は、鏃の長さ、重量ともにほぼ同じである

第四十一圖　打　鑚　六口（上圖）

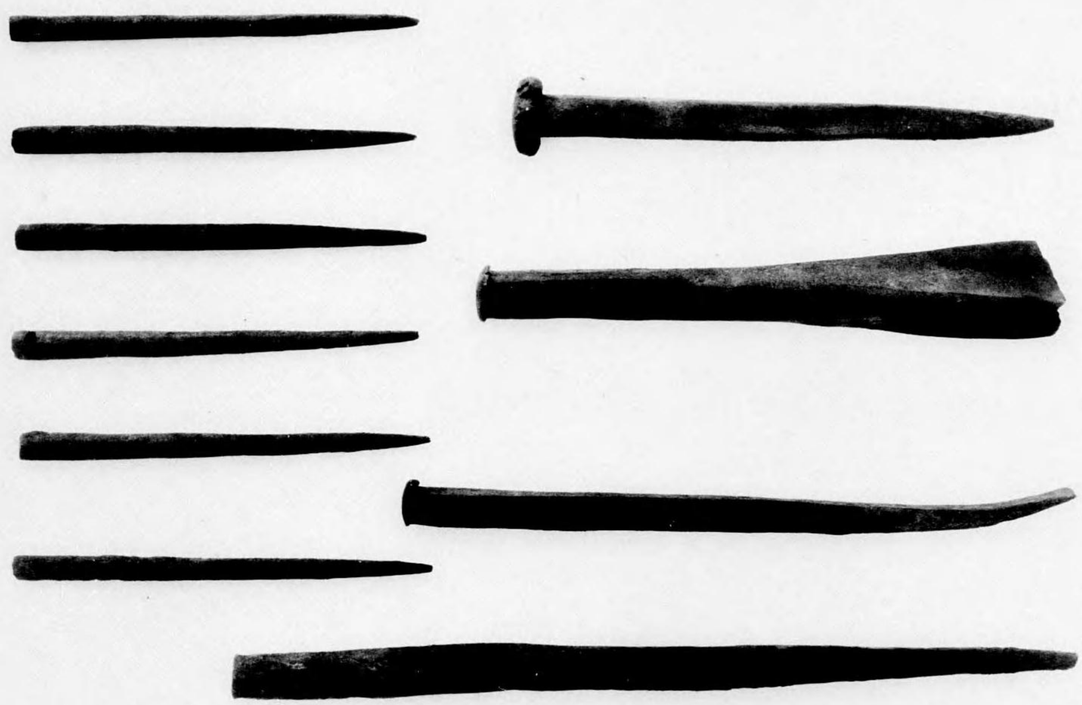
長各　九六糎　徑約　〇六五糎　（原寸　大）

多賀禰　四口（下圖）

（原寸　大）

〔三號〕　長　一三〇糎　徑　一〇糎
〔一號〕　長　一四〇糎　徑　一二糎
〔二號〕　長　一六〇糎　徑　〇九糎
〔四號〕　長　二〇〇糎　徑　一二糎

錐が孔を揉み穿つ具であるに對し、打鑚は打つて孔を通せしめる具である。普通は針を太くした樣な圓錐形をなすが、圖右から四番目に見る如く先端を四角にしたのもある。多賀彌は鑿とも書き金屬の彫刻裁斷又岩石等を破壞するに用ふる具で、其の鋒の形によつて丸鑿、角鑿、平鑿の別がある。下圖右端は丸鑿にして次の二つは平鑿に屬するが、內前者の先を雁股形にしてゐるのは平鑿中でも特殊のものと云ふべきである。最後は角鑿で先端を四角に作る。丸鑿平鑿の頭の「まくれ」は、それらが相當實用されたものである事を察せしめる。



第四十一図　社　鎹　大　口（土師）　（縮尺　六分の一）

参考　鎹　四　口（土師）　（縮尺　六分の一）

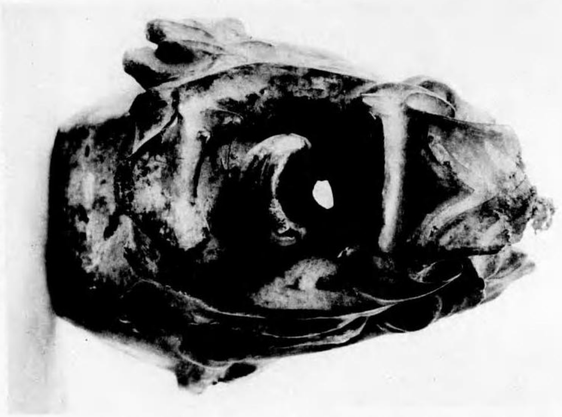
[四号]　長　二〇・〇糎　幅　一・二糎
[三号]　長　一六・〇糎　幅　〇・七糎
[二号]　長　一四・〇糎　幅　一・二糎
[一号]　長　一三・〇糎　幅　一・〇糎

政令　長六・〇糎　幅〇・六糎

もつてゐる。

今回発掘された。考察を試み度のしまへて居る。ものゝ中に社会制度を知れるものもあるから考古学的の考察を進めなければならぬ。考察を進めるに当つて、考察、分析、考察の順序を踏むことは、考察の基礎となるものである。

考察を試みるに当つて、考察の基礎となるものは、考察、分析、考察の順序を踏むことである。考察の基礎となるものは、考察、分析、考察の順序を踏むことである。考察の基礎となるものは、考察、分析、考察の順序を踏むことである。



第四十二圖　銀平脱龍鳳鏡　高一七糎　中九四糎　巾一九六糎

銀平脱龍鳳鏡　正倉院

鏡は工具の一で、鏡面につけられる。一本の柄つて精形の鏡を作り精面に龍鳳の形を刻し、之が全面に漆布を張り乾して木工用の鑿を以て忠実に彫刻を施したものである。

鏡面は、平脱の技法で、金銀平脱の花文を鏤し、其他に鏡平脱の花文を鏤し、大佛上棟式にも用ひられた。

鏡裏を飾り、更に龍鳳に相鳴、耳と口とには朱彩を施し、其の工具とは思はれず、其の装飾的なる点の工具とは思はれず、其の鏡面を呼ぶ。今龍尾を失し、其の鏡面を呼ぶ。

が、口中より鏡面に小孔を穿ち鏡を通せしめるに師へてあるは意匠的にも面白い。

第四十二圖　鐵矛頭側面及平面

第四十三圖　白木倭櫃（四十六合ノ内）（縮寫約五分ノ一）

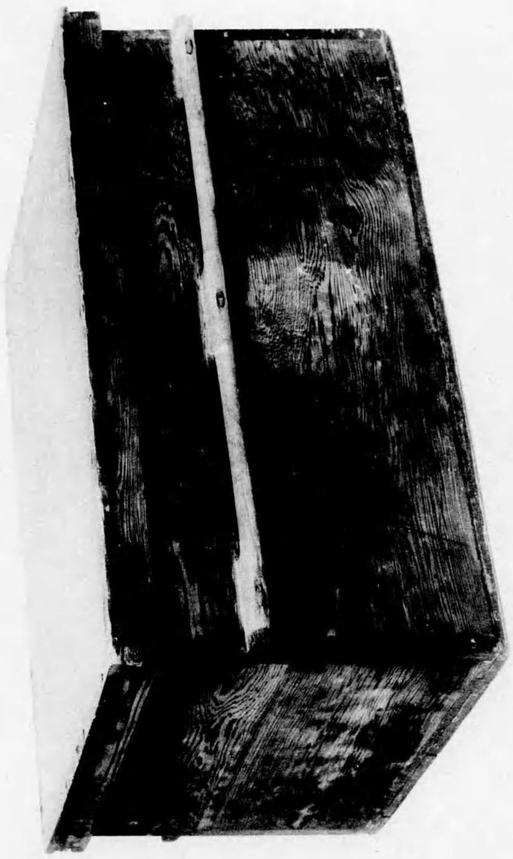
總高　四六七糎

蓋　長　九六五糎　幅　六七〇糎　高　五八糎
天板厚　一・六糎　側板厚　一・六糎

身　長　九一・七糎　幅　六二四糎　高　四五〇糎
側板厚　一・六糎　底板厚　一・四糎

杉の白木造りで、稜角には黑漆を塗り、鐵の丸鋲をかざり、且つ側面に朴材の手懸棧を打つたものである。其の蓋と身とは開閉の爲鐵の蝶番にて繋ぐが、それは三個の壺金具を組合せて用ひ、又正面にも壺金二個を打つて鎖子の爲に備へた迹がある。

御庫中にはこれと同種の櫃總て四十六合を數へるが、大さに多少の差こそあれ、形式は全く同じである。



[illegible]

[illegible]

[illegible]

第四十四圖　白木唐櫃（四十五合ノ内）

（縮寫約五分ノ一）

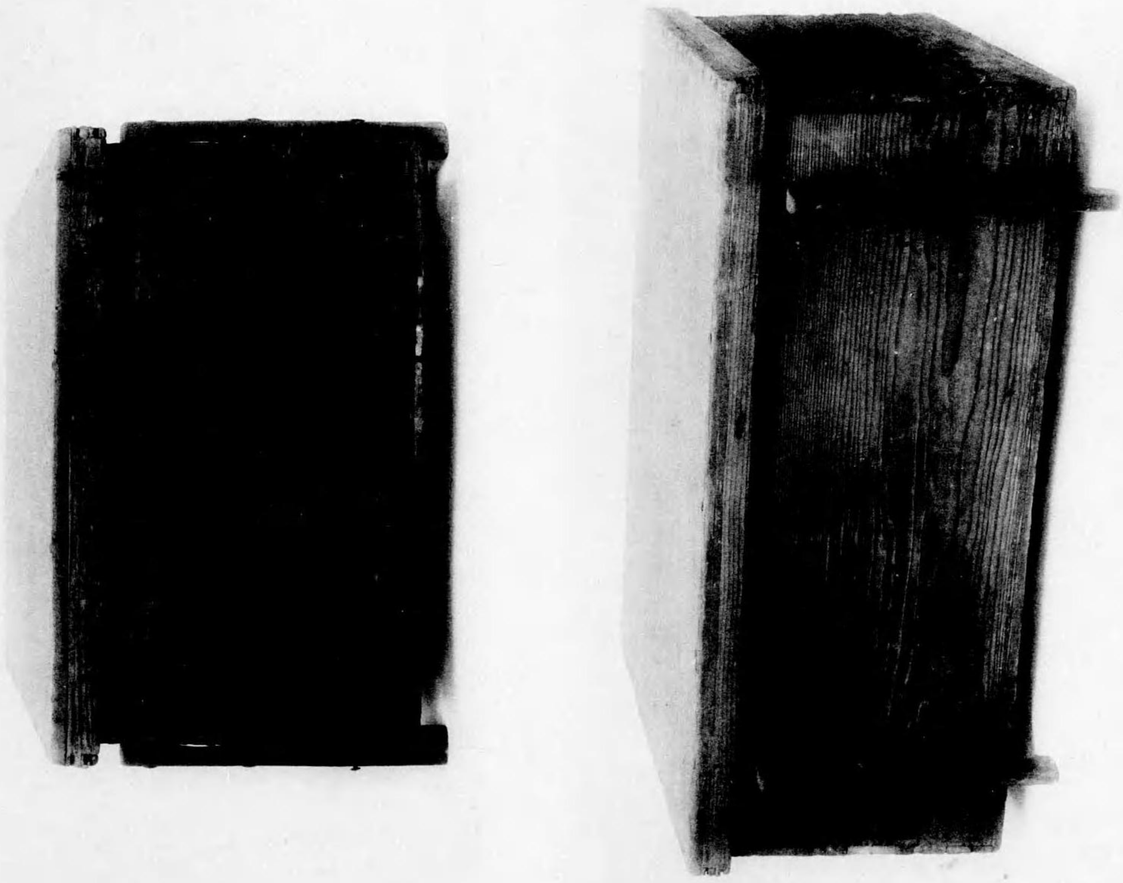
總高　四九七糎

蓋　長　一一一・三糎　幅　七六・〇糎　高　六・〇糎
天板厚　一・七糎　側板厚　一・七糎

身　長　一〇七・五糎　幅　七二・〇糎　高　四二・五糎
側板厚　二・〇糎　底板厚　一・六糎

杉材、白木造。倭櫃の側面に手懸棧のあると異り、これは兩側面に各二本宛の脚を附けて上げ底に作る。然し稜角に黒漆を塗り鐵丸鋲を打ち、脚を杏仁鋲にて止め其の端を黒漆塗りにせる等前者の場合と甚だ似る。

此の種の櫃も亦御府中四十五合を傳ふ。



第四十五圖　赤漆唐櫃（六十二合ノ内）　（縮寫約九分ノ二）

總高　五一・〇糎

蓋　長　九五・〇糎　幅　六五・〇糎　高　七・〇糎
天板厚　一・八糎　側板厚　一・六糎

身　長　九〇・五糎　幅　六一・〇糎　高　四三・〇糎
側板厚　一・八糎　底板厚　一・七糎

櫃形構造共に前掲白木唐櫃に似るが、これは櫃表面全部を赤漆に塗り、四脚と稜角とを黑漆塗りとなし、且つ鐵製鏁子を具す。

赤漆唐櫃にして本櫃と同種同形のものは外に尙六十一合あるが、内鐵丸鋲の代りに金銅花形鋲を用ひたもの十六合、又全然鋲を用ひぬもの二十合を數へる。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第四十六圖　黑漆小唐櫃

（縮寫約四分ノ一）

總高　三三・五糎

蓋　長　五五・〇糎　幅　四五・八糎　高　四・七糎
天板原　一・四糎　側板厚　一・四糎

身　長　五一・六糎　幅　四三・二糎　高　二八・七糎
側板厚　一・七糎　底板厚　一・五糎

前掲の白木唐櫃赤漆唐櫃と全く同型であるが、櫃の內外全部を黑漆塗にしてゐる事に於いて、彼等より更に入念の製と云ふ事が出來る。但し稜角には鋲は無く、脚にのみ杏仁鋲を打つ。鐵製鏁子を具すが、匙のみ舊物で他は新補である。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第四十七圖　赤漆變形唐櫃

（縮寫約五分ノ一）

總高　四八・五糎

蓋　長　一〇一・五糎　幅　七〇・〇糎　高　八・五糎
天板厚　二・五糎　側板厚　二・〇糎

身　長　九五・〇糎　幅　六三・〇糎　高　四六・〇糎
側板厚　一・八糎　底板厚　二・一糎

大體の形は唐櫃に似るが、脚を長くせず底板の上で留めてゐる事に於いて彼と異る。全面赤漆を塗り其の稜角と脚とに黑漆を塗り、又蓋表にも僅かに面をとる。此の種のものは他に全く其の例を見ない。

第四十八圖　黑漆密陀繪唐櫃（鳥草形）（縮寫約四分ノ一）

總高　四三・五糎

蓋　長　八九・五糎　幅　五七・三糎　高　五・八糎
　　天板厚　一・五糎　側板厚　一・九糎

身　長　八五・二糎　幅　五三・〇糎　高　三八・九糎
　　側板厚　一・九糎　底板厚　一・五糎

外面黑漆塗、內面赤漆塗、稜角には金銅の花形鋲を飾り、脚には鐵杏仁鋲を打つ。而して其の蓋表と身の四側には白密陀にて各面異つた文樣を描くも、剝落多くして甚だ鮮明を缺く。

圖は其の二側面を示す。上圖は花園を鵠の遊歩するを描いたものらしく、下圖は鵠を中央にして蓮百合等の草花を配す。

[illegible]

[illegible]

[illegible]